

牧口常三郎「米國の人生地理」、 「米國の地勢と人生」、「外國地理學(部分)」

塩原将行・北川洋子

資料解題

「米國の人生地理」は、社会主義社が1904（明治37）年9月3日に発行した『社会主義』第八年第十一号に掲載されたもので、同年7月29日に神田今金において渡米協会のために演説した大意の筆記である。『社会主義』は、労働運動史研究会編『明治社会主義史料集』補遺（7）（明治文献資料刊行会、1963年）として復刻版が出版されている。

「米國の地勢と人生」は、労働新聞社が1905（明治38）年1月3日に発行した『渡米雑誌』第九年第一号に掲載されたもので、1904（明治37）年12月12日に本郷会堂における渡米協会演説会において演説された大意の筆記である。『渡米雑誌』第九年第一号は、早稲田大学図書館に唯一所蔵されている。

渡米協会における牧口の演説は、その他に、1905（明治38）年12月14日に両国広小路両国館で「米國の産業と地理」と題する演説を行っていることが判明している。

牧口の演説が掲載されている『社会主義』、『渡米雑誌』の発行兼編集人を務めているのは、山根吾一で、山根については、岡林伸夫『ある明治社会主義者の肖像 [山根吾一覚書]』（不二出版、2000年）の労作があり、この著作によって牧口の2つの演説の存在および社会主義者、山根吾一との関係が明らかになった。

『創価教育学体系』第三巻には、「即ち当時唯一の左翼新聞たりし『平民新聞』に故伊藤銀月氏が拙著『人生地理学』の新刊を評した頃は、可なり危険圏に迄踏み込んで居たので、彼等から辛辣な宣伝を受けたのであつた」⁽¹⁾と、また、「依つて国体問題に触れない範囲に於ける社会改良運動として、普通選挙までの同伴に留めて以後は彼等と別れたのである。（中略）故に桃色位には染まつて居たとして、当時のブラックリストに余の名が載つて居たかも知れぬ」⁽²⁾と述べている

⁽¹⁾ 『牧口常三郎全集』第6巻（第三文明社、1983年）、22頁。

⁽²⁾ 同上、23-24頁。

が、山根吾一は、この『平民新聞』の庶務を担当していた⁽³⁾。

山根吾一の詳しい人物像と雑誌『社会主義』『渡米雑誌』については、岡林の詳細な研究を読ん
でいただきたい。

牧口と山根との出会いはいつ頃であったのか。岡林によれば、アメリカから帰国した山根は、
北海道において1894（明治27）年から1899（明治32）年まで小学校訓導及び校長を、1899（明治
32）年から翌1900（明治33）年まで北海道毎日新聞記者をしている⁽⁴⁾。牧口が、北海道尋常師
範学校を卒業し、同校附属小学校の訓導になったのは、1893（明治26）年である。山根が北海道
に来た1899（明治32）年には、牧口は、附属小学校の主事事務取扱（校長職）にある。また、山
根が北海道毎日新聞記者となった1899（明治32）年に、牧口は北海道教育会の理事及び幹事とな
り、『北海道教育雑誌』の編集主任に任命されている。そして、牧口の上京した1901（明治34）年
の前年に山根が上京している。現在のところ、北海道時代に二人が交流したことを示すはつきり
した資料は発見できていない。しかし、お互い知らない存在ではなかったことは容易に推測でき
る。

上京後の二人の深い関係を示す資料として、『渡米雑誌』第十年第四号（渡米雑誌社、明治39
年4月）に、牧口が主幹を務める大日本高等女学会が発展に伴い事務所を移転したあと、山根の
渡米雑誌社と渡米協会が入った⁽⁵⁾との記事が掲載されている。しかし、その後、二人に何かが
あったかも知れないことを示す資料もある。山根は、片山潜から渡米協会を引き継いでいる。渡
米協会が、1904（明治37）年10月10日に出版した片山潜著『渡米案内』増補訂正11版⁽⁶⁾では、
自序の次頁を使って牧口の「米國の人生地理」の演説の一部を掲載している⁽⁷⁾（初版⁽⁸⁾では2
頁を使っている自序を、11版では1頁に収め、その空いた1頁を使った）。しかし、新たに見つか
った1906（明治39）年4月30日に出版された同書増補訂正14版⁽⁹⁾では、牧口の演説が掲載され
た頁は、白紙になっている。

牧口と山根との交流は、1934（昭和9）年12月7日に行われた山根の追悼会に牧口が参加して
いる⁽¹⁰⁾ことから、牧口の社会主義者との決別、山根の再渡米ということがあったにせよ、続い
ており、互いに大事な友人であったと考えられる。

⁽³⁾ 『週刊平民新聞（一）〔史料近代日本史 社会主義史料〕』（創元社、1953年）、4頁の堺枯川、幸徳秋水の
「発刊の辞」の第一段落に「編輯は予等二人専ら之に任じ庶務は挙げて社会主義協会の一員山根吾一君
に托せり」とある。

⁽⁴⁾ 岡林伸夫「山根吾一年譜」『初期社会主義研究』第14号（初期社会主義研究会、2001年）、181-182頁。

⁽⁵⁾ 『渡米雑誌』第十年第四号（渡米雑誌社、明治39年4月）、11頁に、「注意 渡米雑誌社及び渡米協会は、
東京神田区三崎町三丁目一番地の飯田町の停留場の通りで旅人宿三崎館の横で元大日本高等女学会の跡
に移転しました」とある。

⁽⁶⁾ 創価教育研究所蔵

⁽⁷⁾ 「創立者の大学構想についての一考察（1）通信教育部開設構想とその沿革」『創価教育研究』第5号（創
価大学創価教育研究センター、2006年）、63頁の注（36）参照。

⁽⁸⁾ 国会図書館蔵

⁽⁹⁾ 創価教育研究所蔵

⁽¹⁰⁾ 岡林伸夫『ある明治社会主義者の肖像〔山根吾一覚書〕』（不二出版、2000年）、339頁。

次に、牧口常三郎講述の「外國地理學(部分)」は、幹事浜幸次郎⁽¹¹⁾、主幹牧口常三郎の大日本高等女学会が、1905(明治38)年12月1日、同年12月15日、1906(明治39)年1月1日、同年1月15日に発行した『高等女學講義』第二学年第一号～第四号に掲載されたものである。『高等女學講義』第二学年第一号～第四号は、創価教育研究所に唯一所蔵されている。

牧口常三郎は、浜幸次郎とともに、1905(明治38)年5月に、大日本高等女学会⁽¹²⁾を創立し、半年で一学年、2年間で修了する講義録『高等女學講義』を月2回出版し、女性のための通信教育を開始した。第二学年第一号～第四号は、第二学年の講義録12冊の始めの三分の一にあたる。

「外國地理學(部分)」としたが、牧口常三郎が講述した「外國地理學」は全体でどの程度のボリュームがあったのであろうか。

女学会創立直後の1905(明治38)年7月に発行された『二十世紀の婦人』第二巻第七号に掲載された大日本高等女学会の広告には、地理科 東京早稲田中学校教諭小田内通敏とあり、第一学年の地理の講義を牧口は担当していないことがわかる。また、1907(明治40)年12月に発行された『大家庭』第三巻第一号の「本会高等女學講義講師」には、日本地理 小田内通敏、外国地理 牧口常三郎、依田豊、原田武雄となっているので、日本地理は第一学年に、外国地理は、第二学年に配当されていると考えられる。

次に、第二学年第一号に掲載されている内容は、「(一) 外國地理が何故必要であらう」で、第二号には、「(二) 外國地理研究の注意」⁽¹³⁾と「第一篇 世界通覽 第一章 我國との関係國」と「第二章 世界一周通路」の一部が掲載され、第四号は、「第二章 世界一周通路」の途中で終わっている。

また、『高等女學講義』第二学年第十二号⁽¹⁴⁾では、目次の地理科外国地理の講師が、東京府第三女学校教諭依田豊、東京高等師範学校研究科原田武雄となっており、外国地理の講義は、「第二篇アジア洲 第一章東方アジア」の途中から始まっている。

以上から、第六号から第十号の間で牧口常三郎講述の「外國地理學」第一篇は終了し、依田、原田担当の「外國地理學」第二篇以下に引き継いでいると考えられる。「緒言」、「第一篇 世界通覽」、「第二篇アジア洲」という構成から推測すると、外国地理学は第三学年まで継続している可能性も高い。

次に、内容についていくつか興味深い点を簡単に述べておきたい。

第一に、主にアメリカ移住を考えている人を対象とした渡米協会の演説においても、また、尋

⁽¹¹⁾ 浜幸次郎については、前出、「創立者の大学構想についての一考察(1) 通信教育部開設構想とその沿革」『創価教育研究』第5号、29頁、33頁、63頁の注(34)、64頁の注(49)参照。

⁽¹²⁾ 大日本高等女学会については、前出、「創立者の大学構想についての一考察(1) 通信教育部開設構想とその沿革」『創価教育研究』第5号、24頁以下参照。

⁽¹³⁾ 第二学年第二号の該当部分の本文欄外には、「外國地理學 緒言二」とある。第一号の欄外には、そのような記載がないが、「(一) 外國地理が何故必要であらう」、「(二) 外國地理研究の注意」が、外國地理學の緒言にあたると思われる。

⁽¹⁴⁾ 創価教育研究所蔵

常小学校を卒業した若い女性を対象とした「外国地理学」の講述においても、ともに『人生地理学』の第三十章において述べられた生存競争⁽¹⁵⁾について触れている。牧口の人生地理学においてこのことは重要だからであろうか。また、国家間の戦争のない状態でこそ、国家の繁栄がもたらされるという牧口の考えも一貫して主張されている。

第二に、牧口の人生地理学の視点からアメリカの発展を分析し、また、アメリカに対して大きな期待を寄せていることである⁽¹⁶⁾。「米國の地勢と人生」の結論部分を現代語訳すると次のようになる。

小国に別れ地理的に複雑に入り組んだヨーロッパの各国が、その結果として生じた政治的境界線のために、多大な軍備に非生産的消費をして苦しんでいるのに比較して、アメリカは、(地理的に恵まれた環境にあることによって) 平和で豊かな共和国を構成して自由な新文明を築いている。これはいたずらに歴史的な感情、しこりにこだわって紛争を繰り返している旧世界の国々の警鐘を鳴らしているものである。

これは、今回紹介した演説、講述に共通してみられる牧口の人生地理学から見た米国観である。

第三に、「米國の地勢と人生」の前半部分と「外国地理学」の「第三 米國經由」において、サンフランシスコからシカゴを経てニューヨークに至る大陸横断旅行の様子が実際に旅行してきたのではないと思われるような生き生きとした筆致で述べられている。まったく同じ行程で述べているが、これは牧口の筆力によるものなのか、実際にその行程を旅行した誰かの聞き書きによるものなのか気になるところである。

第四に、「外国地理学」には、実際の牧口の地理の授業がどのようなものであったかを知る手がかりがある。

開講にあたり、「(一) 外国地理が何故必要であらう」で、訪問することもない外国の地理をなぜ学ばなくてはいけないか、外国地理を学ぶ理由をわかりやすく、かみ砕いて説明している。

「(二) 外国地理研究上の注意」では、地図の必要、書き込んで覚えるための手帳の用意(牧口は、それを『教科日誌』として出版している)、比較対象、反覆、熟読、取捨選択、知識の秩序整頓の7項目を挙げている。また、第一篇第二章 世界一周通路の「研究上の注意」では、(一) 一度に覚えるに及ばず、(二) 距離を注意せよ、(三) 数字は大体でよい、(四) 距離の覚え方、(五) 比較せよ、(六) 地名の覚え方、(七) 暗記の仕方、(八) 表を作れ、(九) 自修の仕方についての9項目をあげている。

第五に、「外国地理学」において、未発見の牧口の著作である『教科日誌』について牧口自身がその内容について語っている。

⁽¹⁵⁾ 牧口は、『人生地理学』において、生存競争形式の変遷として、軍事的競争時代、政治的競争時代、経済的競争時代を挙げ、人道的競争形式の時代の到来を期待している。『牧口常三郎全集』第2巻(第三文明社、1996年)、393-400頁。

⁽¹⁶⁾ 同上、『牧口常三郎全集』第2巻、399-400頁には、「米國に於て稍々其萌芽を含むと見るべき人道的方式によるものあり」と述べている。

第六に、大日本高等女学会の成立過程を考える上では、「本会の賛助員として本会の創立に特別の御尽力をなされた女子高等師範学校教授榎山栄次氏（下線筆者）」⁽¹⁷⁾ という記述は大変興味深い。榎山は、牧口が北海道師範学校退職の時の校長である。その後も牧口を暖かく見守っている⁽¹⁸⁾。高等女学会幹事の浜幸次郎も牧口が北海道師範学校の附属小学校訓導時代の先輩教員にあたる。

最後に、翻刻は北川洋子が担当し、江沢敏和が校正を補助し、翻刻の正確を期した。

(塩原 将行)

⁽¹⁷⁾ 『高等女學講義』第二学年第二号（大日本高等女学会、1905年）、本稿79頁。

⁽¹⁸⁾ 前出、「創立者の大学構想についての一考察（1）通信教育部開設構想とその沿革」『創価教育研究』第5号、41頁、67頁の注（80）。

米國の人生地理

「社會主義」第八年第拾壹號

米國の人生地理

牧口常三郎

渡米協會の此盛なる演壇に立つことは私の光榮とする所なり私は本日の此盛會について案外におもふと共に、諸君の熱心に深く感動せり、此炎暑に加へ、先刻までは非常の大雷雨なりしにも拘らず、満場立錐の地なき迄に至りたればなり。

さて吾人が海外萬里の異境に移住せんとするに當りて第一に起るべき問題は其地に於ける吾人の生活を妨害すべき『抵抗力は如何』なるべし、吾人は此抵抗力に打勝つことによりて始めて其地に移つるを得、此くして次に起るべきは『如何なる手段によりて生活すべきか』にあるべし、此二間の解決せられざる間は即ち吾人の恐怖心を抱く間にして、従つて海外冒険の壮志を躊躇せしむる最も重要なるものなり、されば吾人は先づ吾人の決心をなすの前に當りて此に就て熟慮するを要す。

此等の疑問を解決するが爲めに考察すべきことは大約左の如し。

- 一、天然的事情
 - （氣候（氣温の限界及變化、濕度、風等）
 - 天産物（生物及無生物）
 - 其他（右二項の原因及結果たるべき事情）
- 二、社會的事情
 - （人口（住民の數、密度）
 - 人種（人種の性質、殊に優劣等）

是れ其大綱のみ、夫等の各項につき細説するは時間の許さざる所なれば茲には略せん。要するに吾人の生國とは風土、人情の異なる地方に渡り、且つ生活の根據を造らんが爲めには、第一に氣候、天産物等の異なるによりて生ずる抵抗力に適應すると共に之を利用し、第二に社會的事情の異なるによりて吾人を拒絶せんとする抵抗力に適應し、之を利用せざるべからず、従つて其地の天然の、及社會的事情に通曉せざるべからず。

此等の必要に向つて材料を與ふるものは、第一に先踏者の探檢及び經驗にかゝる成効談若く

資料凡例

- 一、原文は縦書きであるがそれを横書きに直した。
- 二、本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については、新字体に改めた。
- 三、ルビ等はすべて原文のまま表記した。
- 四、文字の横転、逆転は訂正した。
- 五、本文中で字のポイントが下がっている箇所も同じポイントで記載した。

は失敗談等なり。されど此等は多くは斷片の智識に留まり、或る事項に對しては詳密なれど、他の事項に就ては粗略且つ一々其等の事項を知らんことは繁雜にして心力の不經濟たるを免れざるが故に吾人は之に満足せずして今一步秩序立ちたる智識を要求す。此必要に應じ、右の斷片の材料を以て順序よく組み立てたるものは即ち地理學なり、されば地理學が吾人に緊要なるは論を俟たざる所なり。但し從來の地理學にありては、概ね單に有の儘の山川、湖海、人口、都會等を記載せるに過ぎず、吾人は右の目的に對して甚だ迂遠、且つ無趣味たるを免れざれば、世人は其土地と人類の生活との關係の智識を系統的に組織せる今一步進みたる地理學を望む、余が所謂人生地理學とは乃ちこれなり、然らば人生地理學の緊要なること又た言を俟たざるべし。

説き來りて本題を顧みれば、少許の時間に對しては甚だしく其範圍を制限せざるべからずと思ふ。故に余は本席に於ては其一部分たる『文化發展の上にて米國が如何なる地位にあるか』を見るに止めんとす。就中南米は未だ言ふに足らず、北米の中にも合衆國は其面積六十萬方里、大陸の四割三分を占め、氣候中和、文化發達に好都合なる部分を占有し、米國を代表するの觀あることは、吾人が米國と云へば直ちに北米合衆國と思ふにても明かなれば、主として北米合衆國に就きて論ぜんとす。

米國の文化に於ける地位を論ずるには先づ一般の文化の中心點と土地との關係より進まざるべからず、人類の文化は生存競争(如何なる形式に於て行はるゝに拘はらず)の結果にして、其競争の激甚なる所は即ち人口の稠密なる所なり。今如何なる所が人口の稠密なる所なるかを見るに、(一)、(1)氣力の温暖にして稍々暖に過ぐる所。(2)動植物の餘りに豊裕ならざる所、(3)海岸線の屈曲に富む所、(4)地勢の錯雜せる所等なりされば社會學者、地理學者、史學者は之等を以て文化の發展地となすが如し、是れ確に一面の眞理として吾人は之を信ずるを得、然れども更に細思すれば一面には疑を挿ざる能はざるものあり、何となれば以上の條件を比較的多くを具する地方に於て他の具備せざる地方に比して文化ならざる所あるを見ればなり。例へば他の條件の大差なく、而して海岸線の比較的發達せる地方に於て却つて文化の發達せざる點なきにあらざればなり。かゝる疑念を起して古今東西の文化中心點を通觀するに以上の地點は文化發展の一階段に於ける時代の中心點として、就中初代に於ける中心點として承認し得べきも、總ての時代に通ずる眞理とは云ふ能はずして、文化の中心點は一定の地に發生し、而して或る一定の徑路を辿りて移動するものゝ如し、さて如何なる徑路を取つて移轉するがは即ち茲に少しく攻究せんとする所なり。

先づ現今に於ける文化の中心點より觀察するを以て便とす、之をなすに當つて豫しめ其中の中心點は何を以て見るかを確定するを要す。余は人口百万以上の都府を以て現今に於ける其地方の文化の中心點とするを以て當を得たるものと信ず、何となれば百万以上の大都府は今迄の文化の發展の結果にして、又古代現今及將來の文化の原因をなすものなればなり。此の如き見解を以て其都府の分布を見るに、歐洲に於ては北緯四十八度より北緯六十度までの間、北米に於ては北緯四十二度の内外、亞細亞にては北緯三十六度より同四十度の間にあり。(尤も歐洲及亞細亞には中に除外例あれども之には説明を省く)更に之を海陸の配置

上より見るに、大陸の西岸にては北緯四十八度より六十度に達し、其東岸にては北緯三十六度より四十二度に達す、更に之を等温線圖に對照すれば攝氏二十度と零度との間にあり、就中其大部分は十度の等温線の附近に集まる、是れ唯だ緯度上に於けるのみ、之を以て文化の發達地は右の緯度線内の全部に亘るか如く斷ずるは誤れり。何となれば以上の範圍に於て更に他の制限によりて或る地點に集合すればなり、依て尚ほ精細すれば、何れも水路の沿岸にありて、就中大洋岸の良港の沿岸若くは附近にあり、其最も繁盛なるもの三島國(英國及日本、米國も島國と見做すを得)が悉く其の沿岸にあるは注意すべし、以て十九世紀に於ける文化の中心點の所在を粗ぼ知るに足る。

翻て古代の文化の中心點とするべき其當時の最大都府の分布を見るに上古に在りては攝氏三十度と二十度との間の河岸にあり、中古に在りて之より稍々北進して攝氏二十度と十五度との間の内海沿岸にあり。此の如く考察し來れば、吾人は文化中心點移動の經路を略ぼ確定するに難からず。要するに文化の中心點は(一)、緯度(二)、經度(三)、水路(四)、地勢(五)、國際上の位置の五條件に従ひて移動するが如し。即ち上古に於ける文化の四大中心と稱せらるゝ埃及、アツシリヤ・バビロニヤ、印度、支那の文明中心點は漸次に北進せんとするを、其途中に於て歐羅巴亞細亞兩洲を彎形をなして東西に貫連する大山脈の阻礙するあるが爲めに、東漸及西漸となり、歐洲より米國を経て日本に來りて、他の東漸して日本に集結せるものに接觸し、以て世界を一周し、其移動に當りて水路に沿ひて先づ河岸より内海岸に移りて遂に大洋岸に達し。又た地勢上にては希臘の如き小尨雜の點より歐洲の如き大尨雜の所にたり、國際上の位置にては隣國との紛擾に苦める大陸國より島國に移り、以て現在の状態を呈せしものなり、何故に斯の如き複雑なる經路を取りて移動するかの原因に至りては、今一々説明するの時を有せされば、たゞ一に留めん、先づ水路について見んに、人類の通路として尤も便利なるものは水路なるが、其中にても古代交通機關の發達せざる間は河湖の水路を出づる能はざるが故に、其沿岸は文化の中心點となり。次の時代に於ては内海沿岸に移り、現在にては大洋の公道なるが故に、之に沿ふ所に文化の中心點が集まる。されば此時代に於て大洋岸に直接せざる部分は恰かも、商賣の繁昌なる大通路に遠ざかりたる小路に店舗を張るが如し。また島國が大陸より文化の發達に便なるは島國は海水を以て其城壁とするが故に、大ナポレオンをして『吾をして六時間英吉利海峡の司記者たらしめば吾は世界の王たらん』と叫ばしめたる程に、大陸の擾亂の外に卓立じ、大陸の諸國が軍備及戰亂のために其生産力を盡し、他を顧るに違あらざる間に獨り孜々して他の高尚なる事業に力を盡すを得、是れ英國の盛大を致したる所以なり。

さて此經路に對する北米合衆國の位置を見るに緯度上にては北緯二十九度より四十九度(日本の薩南諸島より千島の端まで)の間にあり。經度上にては東漸西漸文化の通路の中間にあり。水路上に於ては洋岸、しかも貿易上重要な大西、太平兩洋岸にあり。地勢上に於ては歐洲よりも、大尨雜たる平原國たり。國際上の位置に於ては其面積五十万方里、現今に於て他國に對抗すべき強國の資格の最小限と見るを得べき我國の面積の十八倍に當る。隣國に對する關係の距離に於ては英國のサザンプトンより紐育まで凡三千三百哩(二十三)

ヲット汽船の六日程) 横濱よりタコマまで四千二百四十哩 (八日程、桑 港 までより八百哩
 近し) 而して其大陸内に自己に對敵すべきもの一もなければ、此點より正に島國と同様の利益
 を得、斯の如く考察し來れば、何れの點に於ても將來の文化發達に於ける最好の地位にあり
 と斷定すべき理由あるを見る。尚ほ少しく近來の趨勢を見て、此斷定の當否を證せん、近
 來米國の發達は驚くべきものなり。今米國商務省、昨年の調査報告に依れば合衆國の製造
 品總額三十億弗、農産物四十億弗、鑛産物十億弗にして之に水産物を加ふれば千九百年に於ける
 主なる生産の總價額は百八十億弗に達し、其製造業は幾んど英國に倍加し、佛蘭西獨逸及露西亞三
 國を合併せるものに略ぼ相匹敵し、殊に農産物は世界の何れの邦國に比すとも之に軼ぐる者なく、
 又同年に於ける其國內貿易高は約二百億弗、全世界の海外貿易高と幾んど相匹敵すといふ、また隆
 なりと謂ふべし。されば歐洲の産業界は是が爲めに恐慌を來たし、ヤンキーの勢力は今や黃
 禍熱よりは歐洲人の眞面目に恐怖する所而して如何にして此大勢力に拮抗すべきかは彼等
 の苦慮する所にして、昨年の獨逸商業會議所は調査の結果、其に對する方策としては唯だ資
 本の集中あるのみと報告せり。尚ほ其發達の速度を見るに近き五十年間に人口は三倍五分の増
 加なるに、内國貿易高は十倍の多額に上れりといふ、以て米國進歩の大躰を窮ふに足る、何故
 に米國が斯かる盛隆を致せしかに就ては余は其最も主なる原因を米國の位置の島國的なる
 と其地勢の大複雑なるとに歸せんとするものなり、蓋し米國が兩大陸の間に於ける距離上
 の位置、前陳の如くなるに、其内部の地勢は之に比れば小複雑に富めるが故に幾多の小國に
 分割せられて生じたる歐洲の列國が、一時其れが爲めに進歩すると同時に、今や其れが爲め
 に却つて停滯の姿にあるに際して米國は彼の歐洲の列國に於けるが如き隣國との紛雜ある
 なく、從て軍備の爲めに資力を傾くるの必要なく、歐洲の幾んど全部にも匹敵すべき米國は恰も
 歐洲の各一國に於けるが如くに資本を集中し、以て専心經濟的方面の發達に勉むるを得。されば
 今の米國は實に十八世紀に於ける英國よりも好都合の位置にありといふべし、尤も其面積に於
 ては歐洲の全部にも比せられるれど、一方に於て交通機關が發達し、之が爲めに地面は古の十
 倍も二十倍も收縮せられたりと同様なれば内部の交通上の便宜に於ては、往時の英國と比
 して大なる差なし、果して然らば米國の發達が偶然にあらざるを知るに足らん。要するに將來
 の文明の益々發達する地は米國ならんことは以上の諸點よりして否定し能はざる所なり。

牧口常三郎氏は越後の人、幼より苦學を積み、壯なるに及んで益奮勵、數年の刻苦、人生地理
 學を著し、大に好評を博す會時局出版界は打擊を加ふるに關らず、一千頁の書籍を以て暫時第
 四版に及ぶ、以て其の内容を推知するに足る此の文は渡米協會の爲めに演説せる大意の筆記なり。

●人生地理學 牧口常三郎氏著 定價二圓 神田小川町文會堂

米國の地勢と人生

「渡米雑誌」第九年第壹號

米國の地勢と人生

牧口常三郎

横濱より太平洋上四千七百哩の長程を直航して桑港に上陸し初めて二十幾階といふ大廈の櫛比矗立する市街を彷徨ひて一驚を喫し、さて中央太平洋鐵道に乗じて東せんか、凜烈の朔風に送られて出でたる新渡米者には、恰かも二三月陽和の別乾坤に出で、麥圃、葡萄園等の鮮緑滴れんとする、カリフォルニアの沃野の裏に在るの藪を得しむべし。既にして汽車次第に山地に進み、緩き傾斜を登り初むれば、谷間々々に展開する葡萄園、林檎園、橄欖園、崗坂に生へ繁れる蜜柑、橙等は又た特殊の景色を呈し、宛ながら我南海地方に遊ぶの感あるべし。汽車更に登りて二千餘米突の高さに至れば、即ち是れシエラネバタ山脈の鞍部にして、岫に氣候は一變し松、樅等の鬱蒼たる森林の眺望を妨ぐる、不愉快なる雪避け隧道をくぐらざる能はざること數十哩、其間に身は次第に急斜の東側山腹を下り、終には滿目荒涼の高原に出づるを見るべし。即ち是れ今越えし山脈とロツキー山脈との間に介在するが爲めに雨量の缺乏する米大陸唯一の砂漠にして、此間に疾走すること一日半程の沿道には無数の鹹湖、矮小なる灌木の間に隱見し、やがて有名なる大鹽湖の沿岸を通過すれば茲に又た緩斜の山地にかゝる、ロツキー山脈とは即ち是なり。しかも六千尺の高峰にはいつの間にか登り盡し、有名なる米大陸脊骨山脈も、幅廣く蟠るのみにして、高峻なる壯觀は遂に見る能はざるべし。かくて又た非常に緩き東傾面を下り終にミシシッピー河の灌域なる北米の太平洋に出づ、是に至りて又た更に渺茫たる新開拓地の中を疾走し、ミズリー河を渡りミシシッピー本流を渡り、石炭層の發見によりて盛なる鑛業地となれる所を過ぎてミジカン湖岸に出で、シカゴに達し、是處にて又た亞米利加獨特の大工業の壯大に再び驚き、尚ほ東してアパラキヤの低山脈を横切り、氷河作用の遺物たる風光明媚の湖面を野間山間に送迎して遂に太西洋岸の紐育に達すべし、桑港を發してより茲に四日半、此の道程約三千二百五十餘哩、以て米國の大體を察すべし、概するに北米の地勢は之を舊大陸の地勢に比ぶれば頗る單純。アパラキヤ山脈太西洋岸に沿ひ、シエラ、ネバタ山脈太平洋岸に沿ひ、ロツキヤ山脈大陸の中央より稍々西偏して、共に南北の走行を以て連亘し、以て大陸の中部を四個の斜面と一盆地とに区劃す。即ち兩太平洋沿岸の狹隘なる二斜面ミシシッピー河の本支流によりて連絡せらる、ロツキー山脈の東側及びアパラキヤ山脈の西側間の兩斜面、及び西部の兩山脈の間に介在する砂漠的高原即ち是なり。此の如き地勢が、所在の住民の生活に如何なる影響を及ぼすか、是れ聊か本題の豫期する所なり。余は本年夏期、渡米協會の演說會に於て米國の人生地理なる題によりて文化發展上に於ける米國の位置につき一場の演說をなし、ことありき。其内には當然本日の問題に觸接せしかども、時間に制限せられて、要を盡す能はざりしを、今圖らず之を少しく攻究す

るの機を得しは悦ぶ所なり、唯だ恐る淺識以て諸君に満足せしむる能はざるべきを、況んや不幸本日の最後の演壇に上りしをや。請ふ少しく述べしめよ。

亞米利加大陸の最要部たる此等四種の特質地方を一括し、約五十萬方里の面積を統合して形成せるものは北米合衆國となす。斯かる度大なる地積を本幹となして、七千六百萬の人口を統合して、強固なる國家を組織せる者、東洋の支那を除きては、露西亞と北米合衆國とあるのみ。前者が極端なる專制の帝國なるに反して後者が他の極論なる自由の共和國たるは一奇觀たり。而して此大共和國が西曆一七八三年に大西洋岸の狭斜面に於ける十三州、十四萬方里に足らざる面積を以て英國の暴政に抵抗して獨立せしより、僅々七十年間に形成せられしは實に歴史上空前の現象たり。果して然らば是をして斯かる特殊の發達をなさしむる原因なかるべからず。固より其原因につきは多々あらん、しかも其最も重要な原因を地勢におくの眞理に近きを見るものなり。切言すれば吾人は舊大陸とは一種特別の地勢を呈する米國大陸に於て始めて醸生せらるべき人生現象と解するものなり。

蓋し米國は歐洲の人種中に於て比較的進化せる部類の殖民地なり。其等の移住民は概ね本國の社會の生存競争場裏に於ては失敗せる者なりと雖とも、其失敗の原因は彼等自身の事情のみに歸すべからず、主として祖國に於ける社會制度の不備之をして然らしめしものなり。されば彼等をして其競争者にのみ特別の援助を與ふる社會上の眷顧なくして、自由の舞臺に立たしめば、優に相當の成功をなし得べかりしなり。加之其等の總ては海外無縁の異境に於てあつばれ一成功を爲さんとする勇往敢爲の人種にして實際に風土産物の一變せる異境の自然力の壓迫に抵抗して滅亡を免かれたる健軀を具ふる所のものなり。斯かる優秀の移住民及び其の子孫が此の大彪雜なる平原國に繁殖す、農業に、鑛業に、工業に、商業に、總て大仕掛けに集約するべきは必然の勢なれば、之を基礎とする政治組織の大統合的なるべきは大體に於て會得するに難からざる所也。たゞ夫れ大體に於て平原國なりと雖ども、其内には既に四種の互ひに相別離すべき性質の地方を包含し、其間には東と西、南と北、高と低等に於て風土、物産の相異すること著しく、從つて其等各地方の住民相互の間に利害、感情の衝突すべき事情亦た頗る多く、爲めに合衆聯邦の基礎を動かす原因亦た尠なからず。是故に舊大陸の歴史をして米國に繰り返さしめば、數箇の邦國に分裂するは當然の勢なるべし。然るに此人民ありて此土に繁殖す、而して南北に開通せる中央の大平原は、最も分裂し易き南北の地方を連絡せしむるに足り、加ふるに北より南に流る、ミシシピーの大河は、東西の兩斜面を流れ下る衆支流を集めて一萬二千哩もある舟航水路を造りて、四圍の各州の連絡を堅うせしめ、而してアラキヤの低山脈が此等進化せる人民に對して其の兩斜面の地方を隔離せしむるに足らざるは固よりなり。此の如ければ最初大西洋岸に起りし、合衆國は忽ちにしてミシシピーの大平原に膨脹し、茲に聯邦の基礎は鞏固なるものとなりて、残るはロツキ山脈以西の地のみ。

初めカリフォルニヤに金鑛の發見せらるゝや、黄金熱に浮かされたる冒險の歐洲人種も、ロツキー山脈の障壁には避易し遠く南米南端のホルン岬を迂回し來つて終に其地に麥圃、果樹園を開くに至れり。ロツキー山脈、シェラ子バダ山脈をして、ピレ子一山脈の如く、アル

プス山脈の如からしめば、慥かに大太平洋岸に一邦國を特發せしめしならん。然るに兩山脈
 共に其傾斜甚だ緩にして、之を横過する大鐵道の四條迄も現存するよりて知るべき程に、
 北米人種の膨脹連結を阻礙するに足らず、是に於いてか二個の山脈と其間の砂漠とに隔離
 せられし遼遠の大太平洋岸も苦もなく結合せらるゝに至れり。吾人は尚ほ米國の主山脈の悉
 く東西に走らずして南北に亘れることが、合衆國發達に著大なる影響を及ぼし、ことを看
 過すべからず、蓋し各地の氣候を相異せしむる根本的事情は緯度の高低にあり、然るに東西に
 連亘する山脈は其の離隔する兩地の氣候の差異をして更に甚しく増大せしむ、氣候の異な
 る所、自ら産物、人種の差異を生ず。従つて又た自ら人民の風俗、習慣等諸般の人生
 現象に差異を來たし、以て住民をして獨特の發達をなさしむ。是れ南北走行の山脈には殆ん
 ど見るべからざる事情なり、南北山脈は之れにより離隔せられたる兩側の住民の結合上に
 著しき障害とならざるに反して、東西山脈は其兩側住民の統合上に非常の妨害を與ふ
 といふ、プーエー氏指摘の法則の成立する所以なり。去れば若しロツキー山脈乃至其他の山脈
 をして東西に走らしめんか、他の事情を悉く同一なりとするも、合衆國豈に此の如く容易に
 發展するを得んや。此事は一方に數列の大山脈ありて離隔するに拘はらず、東西に於ては
 容易に融合せしに反し、是に比すれば殆んど何等別離の事情の存せずと謂を得べき南北の墨
 西哥及び加奈陀の境界線が儼然緯度線に並行するによりて明かに推知するを得べし、
 要之、現今の北米合衆國は主として優秀なる歐洲人種の子孫と、其中央に大平原の展開
 せる大尨雜の地勢との關係によりて生じたる特殊の結果なりと斷定するも、敢て失當にあ
 らざるを信ず。

之れを夫の小複雜に富める歐羅巴の各國が、其結果として生ぜし政治的分界の爲に多大の軍
 備に不生産的消費をなして、煩悶しつゝあるに對比せば、造化が平和に大共和國を構成し以て
 自由の新文明を發輝せしめ、由て以て徒らに區々の歴史感情に拘泥するに依て互に相紛
 争する舊世界の列國を警醒せんが爲新進の民族に殊更に殘し置きしものにあらざるか。

此文は舊臘十二日本郷會堂に於て開たる渡米協會演說會に於て人生地理學の著者牧口常三郎氏
 の演說されたる大要なり氏の地理學に於て特殊の觀察を有し學術上に貢獻しつゝあるは世に定論
 あり本社は時々其の意見を乞ふて紹介すべし次號には大原博士の加州大學の状況に於ての記事を
 載すべし

外國地理學 (部分)

「高等女學講義」第二學年第一號

外國地理學

牧口常三郎 講述

(一) 外國地理が何故必要であらう

ちよつこらちよいと、外國へ行つて來る様な用事があるでなし、小六ヶ敷しい外國地名の澤山出てくる世界の地理が吾々に何の益に立たう？とは一寸考へるもの誰れでも、思ふところである、が、國を鎖して一切外國の人も物も入れなかつた昔しならばいざしらず、汽車あり、汽船あり、電信あり一瞬千里ともいふべき今の世に、さりとは餘り時勢後れの言ひ草、まあ少し思ひ直して、身の圍りを注意してご覽！。吾々日常の生活に外國の關係の案外に廣大なことに驚くであらう。ランプ下で、此の原稿を書き初めた私は、何よりも先にランプの光りに注意が呼び起こされた。耿々たる光を放つ此石油は露西亞の南方、カフカズの

産かしらん、はた北米合衆國の出かしらん、そもいづ處から來たであらう。油屋の小僧の噂さには遠い遠い海外から來るのだといふこと、聞くに石油の澤山出る所は世界に數多くはないとの事。

ところで露西亞とは漸く戦争が濟んだ許りの今日、よしそこは世界の二大産油地の一つにせよ、そうまだ澤山は來やう筈がない、てば北米合衆國ペニシルバニア大油田の産に違ひあるまひ、何れにしても随分遠方からやつて、來て縁もゆかりもない私にまで關係し、これと同様に毎晩々々皆さまにも關係するといふは、さてさて妙な世の中になつたものだ。そはとにかく論より證據、石油鑛を見て來るに如くはないと、段梯子を降りて、ランプ部屋を窺いて見ると、果してChesterとシルシソバニューヨーク ユナイテッドステーツスラフ アメリカリヤクジ いふ印の側にNew York, U. S. A. (United States of Americaの略字アメリカの合衆國といふこと)のTide Water oil Co (Companyの畧字會社といふ意味)と、鑛の表に書いてある、即ち私の所に毎晩燈して居る石油はアメリカ合衆國ニュー

ヨーク市の潮水石油會社のチェスター印の石油であるといふことが解つた。そこでなほ、日本にもまんざら石油の出る所がないではあるまい、イヤあるある、越後の石油抗といへば我國では、有名なもの、すばらしい仕掛けを以て酌み取つて居ること日本地理の挿画にもあつた事、然るになぜ遙かに遠いアメリカからやつて日本石油とお得意先きを競争するのであらう？これは何にしても、日本に石油が足らないのであらう、價も割合に高いものであらう。さもなければ高い運賃かけて、態々持つて來ては合ふ譯はない それにしても、アメリカといふも大きい國、石油使用高も大したものであらうし、日本へ迄來るからには他の國へも行くに違ひながら

うに、其等の需用を満した上で、尚ほ遙々日本へやつてきて、ちようど耳の折れ下つた西洋犬がやつて来て、在來の日本犬と生存の競争をし、遂に日本犬の種を絶やして仕舞ふとする様に、日本石油と競争するといふのには、どれだけ澤山出るのであらう。その出る所は何處からしらん等と、つぎへつぎへと考へを及ぼして見ると、自然と外國地理もやってみたいといふ心持ちになる。それはたゞ其一例にすぎぬ、現に着て居る木綿の衣服を見ても、穿いて出るゴムのついた短靴を見ても、はたまた掛けて居る眼鏡のカラズ片を見ても、同じ感じが、ぞくぞく出て来る。これは皆さんも同様であらう。皆さんの用ひられるシヨールも、香油も、リボン、外套も多くは外國産であらうが、其等についても其出所を知りたいと思はぬものは恐らくはあるまい。吾々一個人でさへも其關係の深いことは右の如しであるに、まして世界の一等国の中間入をした日本帝國の上から見ると其關係は更に至大なるのである。シベリヤの大平原を通じて遙々やつて来る露西亞の兵と戦争をしなればならぬ事情になったことは茲に特更に申すまでもないこと、現に世界で一番進歩し、一番富強の國として誇つてゐる英國と我國とは同盟條約を結んで、世界の平和を維持して居るのではないか、想ふて見れば世界の全體は國と國とがやつて居る一の生存競争の舞臺で、其間に立て居る國と國は、皆なお互の勢力の平均を以て、無事に暮して行けるのである。各國ともに澤山な海陸軍を備へて多くの費用をかけて居るのも全く其のために、仲々油断のできぬ世の中である。しかも更に懸念すべきものは商工業の競争である、英國でも獨逸でも、米國でも佛國でも、少しでも餘地があつたら自分の國から出る産物、製造品を賣り擴めて利益を得んとして凄まじい勢である。吾々國民も此のやかましい世の中に生れ合はせた以上は、いやでも應でも後れ走せながら、大奮發をして、此平和の戦争にまけない様に、そして折角戦争で勝つた名譽をどこまでも維持して行くやうにしなければなりません。皆さんこんなことは男子の仕事だといふ様に考へてはなりません、現に皆さん方の優しい指で摘んだ茶が輸出品の重なるものとして米國や歐羅巴で、支那茶や、印度茶と得意場を競争して居るではありませんか、其の負け勝ちは目にこそ見えね、直段の高低となつて忽ち影響がやつて来るから、皆さんがあちらへ行つて競争するのは異りはない。生糸でも、羽二重でも、ハンカチーフでも、マツチでも、皆な其の通り。我邦から外國へ輸出する重なるものは大概纖弱い女子の手になるのであります。折角苦心して出來したものの行先がとここで、どういふ人々に愛せらるゝかといふ位は知らないでなんとしませう。外國地理の必要な所以は則ちこれです。

教科日誌 だけを、お話して行くのでありますから、若しも其處に豫め多少の準備をしなければ面白くないこともあらうと氣遣ひます。が、それを讀むに當つて多少準備して置けば紙も經濟で、習ふに多少面白味を感じて勉強も出來やうと思ふのですから、殊更にそれをお勧め申して置くのである。これは手帳でして、用ゐる仕方はそれに異がありますから、其中へ書き込むのです。講義の間に出て來る地名や事柄を成るべく簡約して其の異の中へそれを書抜いて覺えるといふ爲めなのです。諸嬢の平常お使ひになる雜記帳でも不都合はありませんが、特に地理用に出來て居ないものだと、何かにつけて覺え悪いし、且つ混雜しますから、私が從來生徒に教え居つた經驗上から、茲に皆さんに自修用として上記の手帳を用ひることを御相談して置くのであります。

比較對照の事 尚、いろ／＼ありますけれども、此處にはまづ參考だけのお話をして此章を終りませう。其一つは、日本地理で習つたことを本として、外國地理の事柄を、それに對照して記憶することです。他の科目でも斯ういふ風が大切であります、わけて地理に

反覆の事 熱讀の事 これが肝要です。とても一遍の讀み流しで覺えられるといふ者ではありませんから、少くとも二三回は繰返して續むといふことを期せねば不可ません。

取捨選擇の事 こと また、讀むに當つても、スラ／＼讀んで了つて、それで可いといふことではない。能く心中へ留めて、意味を玩味して成るべく頭腦の中へ残るやう氣を注げることで、我國及びわれ／＼の日常生活と密接の關係ある事柄は、最も注意をして覺えて居ることが、單に本ばかりでなく、日々出る新聞の事柄でも必要な事が注目して居ると澤山あります。現に日露の交渉でも、此頃起つた日韓條約でも、はたロシアの内訌などでも。然ういふ事を新聞なり、或は他の人から聞いたりしたならば、それを手帳なり、或は地圖に記入して能く覺えて置くといふことが肝要。

知識の秩序整頓 それから、今一つは、これも地理にのみ限りませんが、講義を覺えるには、單に讀んだまゝ暗誦するといふ計りでは不可ません。一々味つて、それを順序よく並べて表に作つて、それを繰返して見るといふやうにすることです。先の手帳は、それをするに便利の爲めに造らえたのであります、斯ういふ處は尚ほ種々工夫してやるべき事であり、優等の生徒といふやうな者は、多くは斯くの如く種々工夫して自修書を作つて研いた人のやうです。

第一編 世界通覽

本篇の目的 ●●●● 私の特に此篇を許けた趣意は、先づ外國地理をやる前に世界の大體について、一般の智識を持たせたいと思ふてである。世界は今や一面の共通した、生存競争の舞臺となつたことは前後にも申す通りである。で、單に小學校の時代の研究の様に切れ切れの智識に甘んずるならば兎に角、吾々の國と如何なる利害の關係を有つて居るか、各國間は如何なる關係で、成り立つて居るかといふ様な、觀察をなすには如何しても先づ世界を通覽して置いて、それから細かに研究せねばならぬ。世

距離の注意

界大體の智識といふ中に距離の智識が一番大切なことである、皆さん本篇に於て世界は果してどれだけの大きさであるか、我國とはどれだけの距離があるか、我國はそれ等の間の如何なる位置にあるかといふこと注意せねばなりません。

第一章 我國との關係國

モクテキ 目的

●●●●● 本章の目的 世界列國が如何に親密の關係を我邦に及して居るか、然らば吾々が外國地理をやるに、どんな見方をしねばならぬか、といふことを先づ解せしめんとするのである。

ケンキュージン 研究の準備

●●●●● 本章研究の準備 として皆さんは是れまで用ひなされた日本地圖を出して、我邦の四隣を見渡して本文と對照すべきである。

日本の條約國

今、日本で、歐米各國と通商條約を結んで、互ひに商賣上の取引をし、交際をして居るのは、二十ヶ國がある。其中には大きな國もあれば小さな國もあり、又日本よりも弱い國もあれば強い國もあり、遠い國もあれば近い國もあり、我邦と親密な國もあれば、然う親密でない國もある。又、日本より進歩した國もあれば、まだ一文明の恩澤に浴さない國もある。

世の進歩國と國との關係

日本はそれ等の國々の間に立ち、其一ヶ國として、存在して居るので、我々と外國人の關係は、汽車や汽船が出来たについて、益々親密になり、益々接近して來るのである。昔は、西洋へ行くとか、亞米利加へ行くとかいふやうなことは、非常に遠い國へ行くやうに考えて居つたけれども、近頃では、決して然んな遠い者でなくなつて了りました。彼のバルチック艦隊が、遠い遠いバルト海から二十幾艘の軍艦を連ねて、遙々日本へ海戦にやつて來るといふやうな時勢でありますもの、昔の人が聞いたら嘸吃驚いたしませう。

列國の勢力の接近

そこで、ヨーロッパの富強國は地圖でいへば遠いやうであります、其の勢力といふ者は日本に近付いて來て居るのである。試に日本地圖を披いて此周圍を見渡して御覽なさい。日本の北にあるのが、ロシアの領有のシベリアで、東の方に廻ると日本と太平洋と境を接して居る。西へ廻つて見ると、韓(朝鮮)で、新協約が成り立つて日本の保護國になつた。それと續いて居るのが清(支那)で、その留學生が近頃日本に一萬人近くも來て居る。同國は四億萬からの人口があり、殆ど日本現在の十層倍である。然ういふ國であるから、歐米の列國で商賣の得意先を擴げやうとして、互に競争して居る、日本も其の競争者の一人であります。又支那が一朝變動のある時は、其影響が忽ち日本に及ぼして來るのである、

露西亞の勢力 韓 清

フランス 佛蘭西の勢力 アメリカ 北米合衆國の勢力 ドイツ 獨逸の勢力

それから、此支那の南にフランスの領地及び其の保護國がある。臺灣の南の方へ行くと、北アメリカ合衆國のヒリピン群島がある。北へ戻つて、支那の山東半島の南岸の膠州灣はドイツの租借地(九十九年間支那より借りたる者)である。獨逸は此處を土臺として、支那貿易上の勢力を擴張しやうと企て、居る。同じ山東半島の北岸で、我が乃木大將の軍が血と屍とを以て陥れた旅順の相向ひの威海

イギリス
英國の勢力

衛は我邦と同盟國なるイギリスの租借地である。

又、日本の遙か南方にオーストラリアといふ大陸がある。これは英國の領地で見地図上からでは遠いやうであるが、海つづきであるから、日本の船が始終其處へ行き、鹽漬の牛肉や、羊の毛などを輸入して来る。其處までの途中の島々はオランダ、ドイツ等の領地である。

オランダ
和蘭の勢力

東へ廻つて見ると、遙かに北アメリカ合衆國がある。英領のカナダがある。共に皆日本人が移住して居て、商賣の取引をして居る處であるのです。其南は即ち南アメリカで、これも將來日本人の好移住地である。そして皆海つづきである。

國際に於ける日本の位置

斯う見渡して来ると、我國と列國との關係は日常吾々の家で隣り近所と常に行き通ひをして交際をするのと、少しの變りもないのである。昔しこそ海山萬里など申して遠い所と思ふて居たが、今ではつみそこまで列國の勢力がやつて來て居るのである。

同業者の關係

そして此等の勢力の吾國に對する關係といふものは呉服屋の隣へ荒物屋、餅やの隣へ八百屋やが來たといふ様な、異つた商賣上の關係でなくて、餅やの隣へ又た餅やといふ様な同商賣の關係で、平時では商賣敵、一朝事ある日には

壓力の中心

戦争の敵。是に於て、列國の勢力は我邦に對しては一種の壓力となるので、向ふが軍艦一艘増せば、こちらも其れ丈の軍艦を拵へねばならぬといふ様になつたのである。之を要するに我邦は此等列強國と隣り合つて、絶えず壓しつ壓されつ、生存し進歩して行くのである。仲々油斷のならぬ世の中。尤も其間に受ける恩惠といふものも決して忘れてならぬものであります。

研究上の注意

●●●●● (一) 歐米の列強國の勢力は遠い様で近いことに驚くでせう。(二) そこで其等の國を研究するに從來のように唯わけもなく誦誦せずには或は我等の友國とし、或は敵國として觀察すべきものであるといふことが略ぼお解りでせう。地理は決して無暗に下らない地名を誦誦するのが本意ではありませんよ。(三) 雜記帳と鉛筆とを用意なさい、そして略圖をお書きなさい。丁寧なことはいりません、一筆書きさ、圓くでも四角でも。目に見た許りでは覺えられるものではありません。(四) 本章など殊更順序立てゝ手帳に書き抜いて置くことはいりません、地圖があれば澤山です。本文を地圖に合はして一篇讀めば、あとは殆んど讀まなくともよい、其代り本文の意味を地圖にて繰り合し思ひ出すのです。

第二章 世界一周通路

本章の目的

●●●●● 本章の目的 頭から地球でも見せて、世界の大きさが洲分け、國分け等でもすれば、難作ないが、それはあまり、乾燥です。で、吾々に割合に重要な關係を有する世界の通路も大體觀察して、それからのことにしやうと思ひます、本章で距離といふこと注意するが肝要です。

研究の準備

●●●●● 研究の準備 數字は面白くない覺え難いものですが、しかし種々と較べて見れば、まんざら覺えられぬのでもなく、また面白味も出ます。まあ算盤でも要意して、比

較してごらん下さい。地圖は勿論です。

これから皆さんが洋行すると假定してお話し致します。如何な路を通つたらよからうといふに、こゝに三つの便利な路がある。

印度洋航路

(一) 其一つは、日本から南へ出で印度洋を通つて西へ行き、スエズ運河を経て行くので、

シベリア經由米國經由

(二) 其一つは、陸路を北の方、即ちスベリアを通つて西へ行く路。

(三) 今一つは、日本から東へ向つて太平洋を越え、亞米利加へ上つて、大陸を汽車で東へ走つて、太西洋岸へ出で、更に汽船に凡そ一週間計り乗つて、東々へと向つて行くのである。

南米迂回

(四) 其他にも、南亞米利加の南を、太平洋から直ぐに太西洋へ出で、歐羅巴へ行くものもあるが、これは大變廻り遠い路である。

パナマ地峽經由

(五) それが廻り遠いために、亞米利加の南北間に地峽があるのを切り開いて、日本邊りから西洋へ行くのを易くならしめやうといふ工事にかゝつて居るから、近年の中には、出来るであらふと思ふ。然うするといふと、それは又一つの航路になつて、日本から西洋へ行く間に新しい路が出来る譯である。

以上の中の東行の通路と西行の通路とを結び付ければ、それが世界一周の通路で、其中の前の三通路は、現今洋行する人々が必ず經由する所のものである。吾々がこれから世界の地理を研究するに先き立ち、これの通路について少しく觀察したならば、自ら世界の大體が解るであらう。

第一 印度洋航路

第一はこれを印度洋航路というて、三通路の中で、最も古くから東洋西洋間の交通に利用せられたもので、今尚ほ最も重要で、ヨーロッパから來る貨物は概ね此通路を經るのである。此の航路に行くには、まづ日本郵船會社の定期船があるから其に乗るが便利である。

横濱より長崎まで七四〇哩

まづ、横濱を出發點とすると、神戸までが三五〇哩、下の關沓(神戸より二四〇哩。計五九〇哩)が約六百哩、瀬戸内海を出で玄海灘を通つて長崎までが約七四〇哩(下ノ關より一四八哩。計七三八哩)これから外國になるので、洋行する人が愈々本国を距るゝ所とて無量の感じにうたれる所。

上海まで一〇〇〇哩
横濱から下ノ關までの倍
香港まで二〇〇〇哩
シンガポールまで三五〇〇哩

長崎を出て西に行けば直ぐに支那の上海で、此間が約四七〇哩、横濱から一一八〇哩、其處を出て、臺灣と支那との間の臺灣海峡を通つて、支那の海岸に沿うてイギリス領香港へ行く。横濱からの里程が其處まで約二千哩(上海より八七〇哩)ホンコンを出て南西へと支那海を過ぎてシンガホール(英領)へ行く。此處までが三五〇〇哩(ホンコンより一四四〇哩)

此支那海の西岸には佛領印度支那・シヤム・マライ半島などがある。其東南方に來てはフィリピン群島・オランダ領のボルネオ其他の島々がある。地圖を見て能く其

位置を想像して見ると此邊は緯度が零度で、即ち赤道直下であるから、氣候の最も暑い所である。

コロンボ
まで
四七〇〇
哩

それから又一つの海峽マレー半島とスマトラ島との間のマラッカ海峽を西に出れば印度洋で、西へ行くとセーロン島。船はそこのコロンボの港に立寄つて一休みする、此處迄が約四七五〇哩（シンカポールより一二五〇哩）此間の印度洋の北の部分がベンガリ灣で、其沿岸は、即ち英國領の印度である。

アデン迄
六八〇〇
〇

コロンボ港を出て西に行くと、今度はアラビア海というて、其西にはアフリカの大陵がある北の岸には、印度・ベルヂスタン・ペルシヤ・アラビアなどの國々がある。アラビア半島とアフリカ洲との間が狭まつて灣をなして居る、それがをアデン灣といふ、其北岸にアデン港（英領）がある。此處までが六八五〇海里（コロンボより二一〇〇哩）アデン港を出て少し西へ進むと狭い海峽がある、そこを通れば紅海で、此兩岸とも雨の少い所から一帯に赤土の山で殺風景な所である。

スエズ迄
八二〇〇
哩

紅海を北に進むと、そこは切り開いた河で、スエズ運河といふ。其の運河の入口にスエズ港といふがある。こゝまでが約八二〇〇哩（アデンより一三四五哩）此の運河は、もと、アフリカとアラビアとの連続して居た地峽を開鑿して船が通ずるやうにしたので、其以前はアフリカの南を廻つて西洋と交通した者ですが、此の運河の開けたために西洋と日本との交通が非常に便利になつたのです。

長さ四十里の運河を通つて、それを出ると、其所が地中海で、それを西へ航路をとる。其處に一つの間がある、ジブラルタルといふ。地中海とは此までの内海でその沿岸には種々な國がある、地圖によつて段々算へて見ると、一番東の方にある半島が小亞細亞、其北にある土耳其の領土、その間に小さい海峽があつて、其所を東へ出ると黒海、其處の沿岸に露西亞がある。後に戻つて土耳其の南へ廻ると突出して半島形をなして居るのがギリシヤ、其所を西へ廻ると其所がオースタリア・ハンガリー。其南に長靴のやう飛出して居るのがイタリア。イタリアの西へ行くと、其處がフランス。其西へ行つて半島に突き出て居るのがイスパニヤ。地中海の南、スエズ運河のある所がエジプト。其西がアフリカの北岸の國々である。

マルセイユ
九〇〇〇
哩

横濱を出帆して、こゝまで来るにはどうして四十日もかかるから、歐羅巴の北へ行くのでも大概の人は地中海の北岸に上陸して、汽車で行く、フランスやイギリスへ行くものはフランスのマルセイユへ上るし、ドイツやオーストリアへ行く人はイタリアのゼノアへ上る。どちらへもスエズから一千哩餘ある。さうすると横濱からは九二〇〇哩になる、尤もこれは方々へ寄港しての哩數であるから、若し直航ならば更に減るのである、これまでの航海の數は約四十二日といふのが通例ですが、船が大きくなり、速力が早くなるにつれて、此日數は次第に減じて来る。本會の賛助員として本會の創立に特別の御盡力をなされた女子高等師範學校教授横山榮次氏が、洋行なさるにつき去十二月九日横濱出帆のドイツ船に乗り込んで行かれた。其航海日程がイタリアのゼノアまで、四十日明年一月十八日ゼノア着の豫定で、其船賃が中等で四十二磅

(日本金貨に換算すれば四百十二三圓)といふことである。

マルセイユから西に向ひジブラルタル海峡を出ると大西洋で、今度は北へ進んで行く^{タイセイヨー}と英國へ行つて、^{イギリス}ロンドンへ着くのである。此間にビスケイ灣がある。此處は中々波の荒い所で、大概の人が其處へ來ると船に酔ふといふ事で、此處の沿岸がフランス、イスパニヤ。イスパニヤの西にホルトガルがある。フランの北には、ヘルギー、ヲランダ等の國々がある。日本郵船會社の船はベルギーのアンベルス港へも寄る。まづ、歐洲航路の國々を數へて見ると、凡そ此位みである、横濱からロンドンまでの航程が都合一万千海里餘り(マルセイユより約二〇〇〇浬)である、尤も之れは途中の方々へ寄港しての里數でして直航ならば一萬十餘海里に減

前に記した横山氏の此度の航海日程を聞くのに左の如しである、之れを前の里程と對照して見れば興味あることあらう。

横濱發 十二月九日(日數) シンガポール 十二月廿五日(十八日) ポールト
サイト 一月十三日(三十七日)
長崎 全 十三日(五日) コロンボ 全 三十一日(廿四日) ネーブル(伊
太利) 全 十六日(四十日)
上海 全 十六日(九日) アデン 一月七日(三十一日) ゼノア(同) 全 十
八日(四十二日)
香港 全 二十日(十三日) スエズ 全 十一日(三十五日) プレメン(ドイ
ツ) 全 三十日(五十四日)

「高等女學講義」第二學年第三號

かやうに長^{ヨーロッパ}へ航路を行くのですから、其間には奇妙^{キミョー}な人種にも出會はうし、珍^{メヅラ}し
き樹木^{ジュモク}をも見やうし、これまでに目にした事のない者に出遇すであります。
そして十二月か一月頃出掛けるならば極めて暑い處と、頗ぶる寒い所を通るので
から、夏の仕度^{デカ}と冬の仕度^{シタク}と兩方して居なければ不可^{イケ}ないのです。何れ細いことは
後で各國についてお話し致しませう。

それから、此^{ヨーロッパ}航路でヨーロッパへ行く船が何を積んで行^ツつて何を持って參るとい
ふことに注意^{チュウイ}して見ると餘程趣味ある面白いことが想像出来る。これらの細いこ
とも後で各國の地理をやると追々^{ワカ}と判つて來ませう。

研究上の
注意
(一)一度
に覺える
に及ばず
(二)距離

●●●●● (一) 大急ぎ^{リヨヨー}の旅^{タクサン}行とて、澤山^{ソウゲイ}な地名が出て來る、出て來る、送迎
に暇^{イトマ}なき程でさぞお困りでせう。だが、皆んなを一^{イツ}時に覺えるといふことは無理
なこと、またそうするには及^{オヨ}びません。後からの話^{ハナシ}にまた出るから、その時^{トキ}に自
ら覺えられます。(二) こゝは大體距離を知らせるが本意ですからこれだけは工夫

九〇〇里 約六六〇哩直航にして浦鹽斯德、それから西へハルピン迄が、約四五〇哩、横濱から長崎までが七四〇哩だから、日本里數に換算して加て合はせば、都合九〇〇里とある。之を前の大連を経たる路に比べると、此路は五〇里丈け距離が延びて居る。

尤も之れは長崎經由の里數であるから、若し長崎へよらずに下の關から、直ぐに浦鹽斯德へ向へば約六〇〇哩で、前よりは五〇里足らず減ハルピン迄でが約七八〇里(七八六里)となる。之を又た前の航路に比べるとザツと百餘里差ふ譯になる。將來は此の路が世界一周の通路となるであらう。面倒臭い様ですが、之れが將來に日本と西洋、歐洲と東洋、及び世界一周の最短の通路になるのだと思ふと、等閑に出来ぬ様に思はれる。

蒙古 横濱下ノ關間が約六〇〇哩、下ノ關浦鹽斯德間が約六〇〇哩合計一二〇〇哩(六〇〇里)

さてハルピンから、所謂東清鐵道で約四〇〇哩も西に行けば、興安嶺が横はつて之を超ゆるに長さ八千四百尺の長壁道がある。之を過ぐれば、それより荒涼たる蒙古の高原を通るので、一帯の廣々とした砂原や、丘陵の起伏して居るの中に雑草や、灌木が粗ばらに生いて居る間を駱駝に乗つた隊商共が、たまに往來し居るといふことです。ハルピンから六四〇哩の所にシビルの停車場がある、こゝが清國と露西亞との國境で、之れからがシベリヤである。

シベリヤ 清國の界から西に向ふこと約三百哩許りにて、ヤプロノイ山脈に至り、シベリヤ鐵道中の最高點海面上三千五百尺の高さに上りて、その山脈を超え、之れから低い山脈の間に夏は牛羊の群をなして居る所を過ぎて、次第に壁道の多くなる山深い所へ進み、遂に山間の大湖畔に出れば、即ちそれがバイカル湖で、今では鐵道が南岸を迂回して通じたが日露戰爭の中頃までは露西亞が此湖の爲めに兵隊を本國から送つて來るに困つて、冬中は厚い氷の上に鐵道を架けて、向ふの岸から、こちらの岸に渡して居たが、春になつて氷が溶けかゝつた爲めに、その汽車が氷の破れた中へ、のめり込んだりなどして、露西亞が非常に困つた所。

シベリヤの寒サ この邊の冬間の寒さは有名なものです。雪は案外に不足で、吹溜りの所の外は、大概三四尺以下であるが、寒氣が酷烈で、華氏の零以下五十度に達することは珍らしくない程ですから、雪のない所などは、土地の氷結すること地下二十尺餘りにも達し、夏の暖氣にも溶けきれない所があるといふことである。

シベリヤの冬景 氷點下五十度(華氏)以下とは非常な寒さであるから、その頃になると、空氣が驚くべき程に靜穩となり、樹幹や地盤が凍結するにつれて破裂をなし、其音響が數里の外に聞え、樅松落葉松などの大森林の中に棲んで居る野鹿などが、千百も群をなして密集し、互に摩り合つて温度をとらうとし、そして周圍に居るもの程寒さを感じずるものだから、どれもこれも中央に割り込まうとして齧集し、犬や熊などは雪を掘つて深い穴を造り、其中に棲み、會々暴風が雪を捲き揚げて來るときは、天色も爲めに暗くなつて、凄まじい勢となり、それが少し長引くと、往々旅人等の凍死す

シベリヤ
鐵道の終
點
ヨーロッパ
歐羅巴

る者があるといふことです。
かくて見渡す限り、平坦なるシベリヤの大平原を横切ると、シビルから以西二八〇〇哩にしてウラル山脉の南端のチェリヤピンスクといふ所につく、それがこの西比利亚鐵道の極點で、この山脈を過ぐればこれから、歐羅巴ロシアに入るのである。浦鹽斯德からこゝまでが約四〇〇〇哩、之を日本里數に換すれば約一六六〇里、隨分長い間、一樣平坦なる荒野を汽車で走るのである。

ペテルブルグ迄
三二〇〇
里

ヨーロッパの域に入ってから、相變らずのロシアの大平原で、肥沃なる土地の間を尚ほ行くこと一三〇〇哩にして遂にロシアの舊首都モスクバに着く。それから更に西北に進むこと又た一〇〇〇哩にして着く所が愈々ロシアの國都セント・ペテルブルグである。浦鹽斯德からこゝまでの里數が約六〇〇〇哩、大陸を過ぎて初めて海岸に出たので、そこが東郷艦隊に全滅せられた彼のバルチック艦隊の根據を拵へて居つたバルト海である。浦鹽斯德からでも、大連港からでもこゝまで急行列車で來ると十五日晝夜で來れる。二等列車で約二百圓かゝるといふことです。

ロンドン
まで
三五〇〇
里

ペテルブルグから尚ほ鐵道に西に行くと、ドイツ國のベルリンへ着き、それから、オランダ、ベルギー、の諸國を過ぎてフランスへ出で、更に海峽を渡れば我が同盟國のイギリスで、ロンドンが其主都である。この路を通つて、横濱からロンドンまでが、約三五〇〇里（八三〇〇哩）急行で往けば大約二十日間で行けるといふこゝである。

「高等女學講義」第二學年第四號

横濱からロンドンまで三千五百里。三二〇〇里は此地球の直經の長さだから、ロンドン横濱間はそれより少し長いことになる。横濱から長崎までが三五〇里（七四〇哩）だから、之に比ぶると殆んど十倍の長さになる。

印度洋航路の里數が五〇〇〇里（即一〇〇〇哩）ですから之れに比ぶれば一五〇〇里近いことになる。そして旅行日數に於て約十日間減ることになる。

●●●●●
研究上の注意 （一）また澤山の數字が出て來て、覺えるに困難でせう。見ようによつては數字ほど面白くないものはないが、併し何にか基本の比較せらるべきものがあれば、隨分面白味も出て來るものである。勿論小説を読む様な譯けには參りませんが、併しこれが世界一周の最便通路で、洋行する人でなくとも、西洋から來る郵便物、荷物に關係して、日々吾々に關係することであれば、細いことは抜きにして大まかみの所だけ覺えて置くことは、之れから國民に必要なことである。（二）其覺える仕方は前にお話致しました、面倒でも別に比較して覺えて下さい、世界の地理には必要なことですから。

第三 米國經由

サンフランシスコ
桑港
まで
四七〇〇
里

歐^{オシユー}洲へ行く第三の通路は東へ向つて米國を過ぎ^{タイセイヨウ}太西洋を渡るのである。横濱から^{コウバク}廣漠たる太平洋の面を直^{チヨクヨウ}行すると四千七百哩にして米國の^{ベイコク}サンフランシスコに着く。其處へ上陸すると初めて二十幾階もある大^{タイカ}廈の^{センビシヨクリツ}櫛比矗立する市街を見て一驚を喫するであらう。それから中央太平洋鐵道に乗つて東の方へ向うと本國を^{リンレツ}凜烈の朔風に送られて出でた旅行者は、恰も日本の二三月頃の麗かなる氣候の所に出で、^{ブドローエン}麥圃^{シタハ}葡萄園などの鮮綠^{シタハ}滴れんとする、カリフォルニアの肥沃なる平野の中にあるのでせう。

既にして汽車が次第に山地に進み、^{サンチ}緩き^{ユル}傾斜^{ケイシヤ}を登り初むれば、そこらの^{タニマ}谷間々々に展開する^{テンカイ}葡萄園、^{リンゴエン}林檎園、^{オリブホ}橄欖園があちらこちらの^{ワカサカ}岡坂に生へ繁つて居る。蜜柑、^{トクシユ}橙等は又た特殊の景色を呈し、宛ながら我邦南海地方に遊ぶの感じがあるでせう。汽車が更に登りて二千餘米突の高さに至ると、即ち是れ^{スナハ}シエラネバタ山脈の^{サンミヤク}鞍部であつて、こゝに来ると、^{ニハカ}頓に氣候は一變して、^{マツ}松、^{モミトウ}樅等の^{クワンソウ}鬱蒼たる森林の眺望を妨げる、不愉快なる^{ユキヨロ}雪避け^{トンネル}隧道をくだらなければならぬこと數十哩、其間に身は次第に急斜の東側山腹を下り、終には満目荒涼の高原に出づるを見るであらう。即ち是れは^{スナハ}今越えた^{イマコ}山脈と^{サンミヤク}ロッキー山脈との間に介在するが爲めに^{ウリヨウ}雨量の缺乏する^{ベイタイリク}米大陸唯一の^{サバク}砂漠で、此間を疾走すること一日半程の沿道には、無数の^{カンゴ}鹹が^{ワシシヨ}矮小なる^{インケン}灌木の間に^{グレートソルトレーキ}隠見し、やがて有名なる大^{ツカ}鹽湖の沿岸を通過すれば茲に又た^{クワンシヤ}緩斜の山地にかゝる^{サンミヤク}ロッキー山脈とは即ち是れであります。

併も六千尺の高峰にはいつの間にか登り盡し、有名なる米大陸脊骨山脈も、幅廣く^{ワダカマ}蟠るのみで、^{コシユン}高峻なる壯觀は遂に見ることは出来ぬ。

かくて又た非常に緩き東傾面を下り終に^{ユル}ミシシピー河の^{トウケイメン}灌域なる北米の^{カハ}平原^{クワンキキ}に出る。是に至りて又た更に^{ベウボー}渺茫たる^{シンカイタクチ}新開拓地の中を疾走し、^{シツソウ}ミズリー河を渡り^{ワカ}ミシシピー本流を渡り、^{ホンリユー}石炭層の^{ハツケン}發見によりて盛なる^{コウギョウチ}鑛業地となれる所を過ぎて^スミジカン湖岸に出で、^{ヨカン}シカゴに達し、是處にて又た^{アメリカドク}亞米利加獨特の大工業の^{ソウダイ}壯大に再び驚き、^{ナヒガシ}尚ほ東して^{テイサンミヤク}アパラキヤの^{ヒョウカサヨウ}低山脈を横斷り、^{フーコーメイビ}氷河作用の遺物たる^{フーコーメイビ}風光明媚の^{ニューヨーク}湖面を野間山間に送迎して遂に^{サンフランシスコ}太西洋岸の^{サンフランシスコ}紐育に達するであらう。桑港を發してより茲に四日半、此の道程約三百五〇餘哩(八〇〇餘里)。横濱からこゝまでが約三五〇〇餘里横濱から、桑港へ行かず、更に北の英領の^{クラ}カナダの^{タンシク}シャートルに向へば、此の里数が約四千二百哩前のに比べると、凡そ五百哩短縮することになる。紐育から更に汽船にて^{タイセイヨウ}太西洋を渡ると、凡そ三千三百哩にして、^{イギリス}英國の^{ササンプトン}ササンプトンに着します。此間を一時間二十三哩の速度の汽船が、全速力を以て進行すれば、凡そ六日にて達することが出来る。ロンドンはこのから二十里許りしかないから、横濱からの里数を通算すると、約五千餘里に達する。そして、此間を約二十六日で行くことが出来る。それを前の二つに比べると^{インドユー}印度洋航路と同じ里数で、^{インドユー}シベリヤ經由に比べると千五百里延長することになつて居る。

ニューヨーク
紐育まで

横濱より
倫敦迄
五〇〇〇
里

第四 世界一周航路

世界一周
通路の日
数

此の米國經由通路に、印度洋航路か、或はシベリヤ通路を連続したものが、即ち現今利用せられて居る世界一周の通路である。

世界一周の通路日数を積算すれば左の如し。

一、	^{ニューヨーク} 紐 育 (北米合衆) よりロンドン (英國) まで	六日
一、	ロンドンよりゼンア (伊太利) まで	三日半
一、	ゼノアよりスエズを経て横濱まで	四十二日
一、	横濱より ^{サンフランシスコ} 桑 港 に至る	十日
一、	^{サンフランシスコ} 桑 港 より ^{ニューヨーク} 紐 育 まで	四日半
	計	六十六日

世界一周
通路の長
サ

以上の米國經由通路五千里に、印度洋航路五千里を加へて、此の世界一周通路が通計一萬里。